

Title	グローバルCOE私的総括
Sub Title	Personal reflection of CARLS
Author	渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2012
Jtitle	Newsletter Vol.18, (2012. 3) ,p.10- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	目次のタイトル：事務局だより
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000018-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グローバル COE 私的総括

グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」は5年の月日と1,178,114,000円の直接経費、216,105,000円の間接経費をかけ、この3月に終了する。8名の海外事業推進担当者を含む35人の事業推進担当者、9名の特任教員、16名の研究員を擁し、MRI、NIRS、TMSなどの脳研究施設、マーモセット研究施設、カラス研究施設を持つ Centre Of Excellence の名に恥じない拠点が予定通り形成されたといつてよい。拠点リーダーとしては肩の荷が降りた気分である。以下、これまでの活動を私的に総括したい。

組織、運営、民主主義

本拠点の本大学での位置づけは先導研究センターのひとつである。先導研究センターとは外部資金によって運営される研究センターの総称であり、全体の長は研究担当理事が務める。拠点の運営では拠点リーダーの下に関係する研究科委員長からなる幹事会を設けた。これは拠点が大学院教育と密接な連携のもとに運営されるからである。実際には研究科の方で委員長の交代などがあり、前委員長が幹事を務める場合もあった。通常の運営はこの幹事会で行い、予算と決算のみ各種委員会の長による運営委員会で行った。お気づきのことと思うが、この運営体制は体よくいえばトップダウン、有り体に言えば拠点リーダーの独裁である。そのような組織にした理由は大学教員がそれぞれ忙しくて日程調整が難渋することと多くの教員は拠点運営などに興味がないからである。一方で、なにかを告白すること（profess）が教授の仕事であるから、会議にできればそれぞれその場の思いつきで発言するので迅速な決定ができない。そのような訳で独裁に近い運営をしたが、民主主義を信奉する先生方には随分専横な拠点リーダーに見えたと思う。ただ、可能な限り各種委員会に決定権を移譲し、研究者が自主的に判断決定できる範囲を広くした。

事務部門は大学の研究支援センターに所属し、3名が常勤を務めた。事業推進担当者はもとより拠点リーダーといえどもいわばパートタイムであるから、常勤の事務部門の能力が拠点の運営の正否を大きく左右する。そこで僕も可能な限り短時間でも毎日事務部門に顔を出すようにした。途中何回か交替があったものの、僕はこの拠点の事務部門を誇りに思っている。

融合研究、分業研究、そして個人

他の多くの GCOE 拠点が分野融合的であることを掲げた。しかし、多くの場合、それらは融合研究であるよりは分業研究にすぎないように思う。分野の融合は個人の中で実現されていなくてはならない。他分野の人と話ができる程度では分業の範囲を出ない。個人の内なる融合は、個人に極めて厳しい努力を強いる。僕自身が大学で受けた教育は実験心理学だが、電気生理、脳損傷、組織学、薬理学などの技法はそれぞれ他の研究機関で修行して習得したものである。そこで、拠点としては個人が出来るだけ効率的に他分野の知識、技術を習得できるような仕組みを大学院の科目改革、科目外の講座、講習会の設置などで作った。その結果、哲学

を専攻する大学院生が MRI の機械を操作したり、美術史を専門とする研究者が心理学の実験を行い、あるいは、もともとは言語の研究者だったものが新生児の脳活動を測定するといった状況を産み出した。一定の成功といえるが、なおかなりの若い研究者が「籠城主義」で自分の専門を少しでも外れると全く興味を示さない。ある時期に特定の研究に深く沈潜していくことの重要性はよく分かっているが、知的好奇心まで失うと元も子もない。若手育成の難しい問題といえる。

国際化、連携拠点、若手の成長

国際化も多くの拠点が目標として掲げたものである。若手については早期経験（early exposure）と発信力育成に力を注いだ。拠点は海外に5つの連携拠点を持ち、機関レベルで協定書を結び、若手による共同セミナーを毎年開催した。基本的にはこちらからは教授レベルのものは参加せず、若手同士の自主的な企画運営に任せた。ケンブリッジとのセミナーでは学寮での晩餐会のメニューなども一緒に決めたい。5年間で海外セミナーでの若手研究者の発言力は格段に進歩した。運営に携わった若手諸君に心から感謝する。国際学会での発表も支援し、多くの発表がなされ、また研究者間の個人的交流も活性化されたようである。アカデミック・ライティングの講座を設けたが、国際誌への投稿はもうすこし活発でもよかったかと思う。また、修士課程の大学院生への支援ができなかったのも規則とはいえ残念であった。

若手育成、若手雇用、そして散逸

GCOE は若手育成が看板である。僕の拠点は理系技術で武装した文系拠点であるので、脳科学の先端技術を導入した。GCOE の前身である 21 世紀 COE では研究機器としては4台目の納品となる全頭型光トポグラフィーを導入し、GCOE では当時医学部にもなかった3TのMRI機器を導入した。GCOE の採択審査の際には「教育拠点」に最新鋭機器は必要かという意見があったと聞くが、心ないことである。最新機器で訓練を受けてこそ最前線で即戦力となる人材を育成できるのである。

若手育成には訓練という面とは別に雇用や職位賦与という面がある。これは案外面倒であった。慶應義塾大学では研究科での人事と前述した先導研究センターとしての人事の両方が可能であったが、できるだけ研究科としての人事を行った。しかし、大学の学部や研究科はいわばアンシャン・レージュムで運営されているので、外部資金によって雇用される研究者への職位賦与に抵抗感があった。僕としてはかなり忍耐強く説明したので、ある程度は理解してもらえたと思う。GCOE プログラム終了とともにこれらの雇用も終了する。我が国の今後の学術を担う優秀な人材を集めたので彼らの散逸は研究大学としては大きな痛手になろう。老婆心ながら、再度このような研究チームを構成するのは随分大変だろうと思う。

「論理と感性の先端的教育研究拠点」拠点リーダー 渡辺 茂

Personal reflection of CARLS

Global COE program “Centre for Advanced Education on Logic and Sensibility” is a direct cost of 1,178,114,000 yen month and five-year, over indirect costs of 216,105,000, yen to the end this March. I would say we have succeeded in establishing a Centre Of Excellence.

Organization, management, democracy

The manner I have managed the CARLS was top-down rather than democratic one. I believe it was efficient and productive for a short-lasting research center. Because all professors in CARLS were part-timer not full-time member, the success of the operation greatly depended upon the ability of the full-time administrative staffs and I was proud of the administrative staffs of this centre for their excellent work.

Division, fusion, individual

Interdisciplinary approach is listed in many GCOEs. However, in many cases, they are division of works rather than the fusion of disciplines. Such fusion has to be achieved in each researcher. We have tried to establish a system to facilitate such a real fusion as efficiently as possible.

Globalization, international collaboration, training of young scientists

Globalization of research is one main purpose of the CARLS. We concentrated from in early on to the exposure and development of ability of young scientists to international collaboration. We organized joint seminars with foreign universities young-scientists every year without the attendance of Japanese senior professors and I personally realize their great progress in their communicative skills.

Training, employment, dissolution

Another main purpose of the GCOE program is to train young scientists. Our GCOE is a centre of liberal arts, which is equipped with scientific instruments. We introduced NIRS, 3T MRI, TMS etc. Employment and giving professional advancement of young researchers has been another issue of the GCOE program and we have organized research teams with outstanding young researchers. Closing the GCOE program means termination of the employment. Dissolution of these outstanding research teams should be serious a loss for the academia and especially for research universities, like Keio.

プレスリリース情報

Depression in Japan Psychiatric Cures for a Society in Distress

Junko Kitanaka

Published by Princeton University Press, 2012



Since the 1990s, suicide in recession-plagued Japan has soared, and rates of depression have both increased and received greater public attention. In a nation that has traditionally been uncomfortable addressing mental illness, what factors have allowed for the rising medicalization of depression and suicide? Investigating these profound changes from historical, clinical, and sociolegal perspectives, *Depression in Japan* explores how depression has become a national disease and entered the Japanese lexicon, and how, in a remarkable transformation, psychiatry has overcome the longstanding resistance to its intrusion in Japanese life.

“In this beautifully nuanced book, Kitanaka documents the burgeoning of Japanese depression over the past decade. In portraying this phenomenon, she deftly draws readers into the intertwined worlds of pressure-

cooker work environments, individuals suffering deep malaise who are frequently suicidal, and the compassionate but at times conflicted practice of Japanese psychiatry. Suffering individuals are medicated, but psychiatrists, exquisitely sensitive to the oppressive ‘forces’ of society, also politicize depression.”—Margaret Lock, author of *Twice Dead: Organ Transplants and the Reinvention of Death*

“This is an important ethnographic, cultural, and historical account of a crucial topic in society. Illustrative and compelling.”

—Arthur Kleinman, Harvard University

“With its high quality, simplicity, and eloquence, it is bound to become *the* book on depression in Japan.”

—Adriana Petryna, University of Pennsylvania